

特別企画「ディケンズと帝国」論文3

「不安のとげ」：
『エドウィン・ドルードの謎』と帝国
“The Thorn of Anxiety”：
The Mystery of Edwin Drood and the Empire

田中 孝信
Takanobu TANAKA

序 論

『エドウィン・ドルードの謎』(1870)は、従来の作品と比べると、舞台はクロイストラムとロンドンに収縮してしまっている。だが地理的の広がりには、帝國的要素が随所にちりばめられることで、『荒涼館』(1852-53)や『リトル・ドリット』(1855-57)を遥かに越える。第一次・第二次阿片戦争と中国、スエズ運河とエジプト、ディケンズが『我らが共通の友』(1864-65)を献呈した親友サー・ジェームズ・エマソン・テナント(Sir James Emerson Tennent)とセイロン、博愛主義者ハニーサンダーの背後に横たわるエクセター・ホールとジャマイカ問題。¹これらによって読者は、作品の時代設定が本質的には1860年代後半であることを認識する。しかし、背景を作り出すためだけなのだろうか。これらの多くは、イギリスがオリエントに対して抱く負のイメージを帯びて、主な登場人物と何らかの形で結びついており、作品の本質に係わっているのである。二重生活を送る聖歌隊長ジャスパーが阿片によって生み出した淫靡な夢現に現れるトルコ、エドウィンが近い将来許婚のローザを連れて技師として赴任する予定のエジプト、オリエント化されたイギリス人としてのランドレス兄妹の性質とセイロンの相関性。特に自分が行きさえすればエジプトは文明化すると思込んでいる、自由主義時代の所産たるエドウィンに対して、ネヴィル・ランドレスが対立関係にある点には、中心を成す本国対周縁に追いやられた植民地という強者と弱者の関係があからさまな形で読み取れる。だがはたして、この本国対植民地、言い換えればイギリス対オリエントという枠組みそのものがそれほど堅固なものなのだろうか。本論ではこの点を、帝國的要素を帯びた登場人物との係わり合いを通して探ってゆきたい。

逆侵略の恐怖

ネヴィルは妹のヘレナ同様、「下等な人種」(49)²に混じたために「オリエントの血」が「かすかに後天的に混じり」³容顔や性格の点で他のイギリス人と一線を画する。彼らの異種混淆性は、「獵師のような感じを与えるけれども、追う側というよりはむしろ追われる動物を感じさせるところがある」(44)という逆説的な描写から明らかである。特にネヴィルは、比喩的な意味で、セイロン人によって体内に「虎の血」(61)を与えられている。本国に帰還した彼は、町長サプシーの言う「非イギリス的な顔色」(135)という、19世紀末以前に人種差別の一番普通の基準だった皮膚の色ゆえにイギリス人としてのアイデンティティを拒否された、定まった土地を持たない「ランドレス」なのである。このネヴィルに対してエドウィンは、人種的優越感に基づく傲慢さをあらわにする。彼から見ればネヴィルは、「『君には白人についてとやかく言う資格はない』」(60)という言葉が示すように、クロイストラムへの侵入者であり、アウトサイダーでしかない。それに対してネヴィルは、激情を露骨に表出する。「虎の血」を持つ、この復讐に燃えた色の黒い若者は、その生命力ゆえに、まさにイギリス社会にとって脅威であり、サイド(Edward W. Said)の言葉を借りれば、「合理的で、有徳で、成熟しており、かつ『正常』なヨーロッパに、「不合理的で、下劣(墮落して)いて、幼稚で、『異常』なオリエントを持ち込む「危険な動物」(60)なのである。⁴

オリエントは何も公然と持ち込まれるだけではない。それは、オリエント化の危険を伴って、イギリス社会の内にも潜んでいる。阿片戦争によって生じたイギリス人の罪の意識は、1860年代半ば中国人が陸続と移住して来るのを目の当たりにしたとき、イギリスに輸入される阿片のほとんどがトルコ産だったにもかかわらず、復讐心に燃えた中国人が阿片によって今度はイギリス人を徐々に骨抜きにするのではないかという不安を生み出す。1868年の薬事法制定後も、その危惧は世紀末にかけて強まり、阿片を万能薬と考える根強い風潮の一方で、ある聖職者は阿片喫煙を、「広がり、我々の体の重要な器官を攻撃する疫病」と見なし、「我々の政府による阿片貿易の結果として生じた反動、応報」だとする。⁵ このとき彼は、阿片喫煙によって「中国人化」が伝染し、イギリス人としてのアイデンティティが侵食されるのを恐れているように思える。そして、この阿片喫煙の中心地となるのが、帝国の首都にオリエントのミニチュアとしてできあがった地域、すなわちイースト・エンドの阿片窟なのである。阿片窟は、雑誌記事等では、寡黙で乱暴な東洋人(オリエンタル)が経営したり足繁く通う場所である。彼らの秘める暴力性は、彼らが喫煙を通してドック地帯の貧しいイギリス人女性を同化吸収するとき、ますます恐ろしいものとなる。阿片を吸う女性の一人は、「『わたしゃ、ここにかれこれ12年ほど住んどる。おかげでいつのまにか、あいつらの

やり方がいっぱい身についたよ』と述べている。⁶ 実際彼女は、“Mother Abdallah”というオリエント風の名前でのみ知られている。さらに、幾人かの中国人経営者はイギリス人女性を妻に持つ。彼女たちはオリエント化されるのみならず、ある記事によれば、阿片を用いる中国人夫の吸血鬼の力によって不気味な変化を遂げ、オリエント風の生ける屍となる：“Poor English Mrs. Chi Ki looks as though she is being gradually smoke-dried, and by and by will present the appearance of an Egyptian mummy.”⁷ 人種の差異の表象は性的差異の表象と密接に結びつき、社会が標榜する本国・男性・秩序という概念形態と対立する、オリエント・女性・混沌という特性が明らかにされるのである。

これが、『エドウィン・ドルードの謎』冒頭に見られる阿片窟の場面成立にまつわる背景の一つである。それを反映して、冒頭場面でも中国人やインド人水夫は劣った野蛮な人種として描かれ、イギリス人女性パフファー妃殿下は阿片を吸うとオリエント化される：“[T]he woman has opium-smoked herself into a strange likeness of the Chinaman. His form of cheek, eye, and temple, and his color, are repeated in her” (2). しかし、ここで重要なのは、社会の中核を成すイギリス人男性ジャスパーが阿片窟に現れたことだ。それも、現実生活の「締めつけられるような単調さ」(11)から逃れるために彼は自ら進んでやって来たのである。この彼もまた、彼女との接触を通してオリエント化されんとする：“As he watches the spasmodic shoots and darts that break out of her face and limbs [. . .] some contagion in them seizes upon him: insomuch that he has to withdraw himself to a lean arm-chair by the hearth [. . .] until he has got the better of this unclean spirit of imitation” (3). イギリス人女性が“unclean spirit”に犯されるのみか、彼女が媒介となってイギリス人男性をも感染させ、オリエントとイギリスが混ぜ合わされた両義的存在にするのである。この作品以前に描かれていた阿片窟での喫煙者は、オリエントの男、もしくはドック地帯のイギリス人女性だった。したがって、阿片の広がりには周縁部に限られていた。ところが今や、読者は、外見は立派な中産階級の一員が、阿片によるオリエントの影響下で第二の生活を密かに楽しむ場面に出会う。世紀末のワイルド(Oscar Wilde)やコナン・ドイル(Sir Arthur Conan Doyle)につながる現象がここに初めて登場したのである。

この阿片窟は、パフファー妃殿下を“mother” (204)、ジャスパーを“poppet” (205)、“chuckey” (206)とする、歪んだ母子関係から成る空間である。それまでの雑誌記事に見られた中国人男性支配とは異なり、ジョン・チャイナマンの父としての役割が否定されていることから分かるように、父は必要とされない。母による授乳のイメージだけが、子供たる客と彼女との間に成立する。このとき母としての役割は、男性の金銭的損失を伴う売買に依拠している。これは、家父長制

中産階級社会が規定する、自己犠牲心に富んだ「家庭の天使」像としての無私の母親像とは全く相容れない。子育ては市場原理に支配されており、女性は家庭、男性は仕事という役割分担は打ち破られる。

ジャスパーは、この似非母子関係が支配する個人的生活と、家父長制社会での公的生活とを区別しようとするが、二重生活の常として、その区別は曖昧なものとなる。阿片は阿片窟に止まらず、日常風景の中にまで広がり、感染者を増やす。クロイストラムの自分の寝室でジャスパー自身が吸うのみならず、エドウィン、ネヴィル、石工ダールドがその犠牲となる。阿片の広がりだけではない。阿片によるジャスパー個人の変化が、他の人々の視線に晒されるのだ。作品冒頭の夢には忍び返しが現れる。それは、彼の意識にはめ込まれた罪の意識と不安を表していた。だが、この忍び返しを越えて、伝染力を持った“unclean spirit”は広がって行く。実際のところ、夢を描いた一節そのものに不安定要因が氾濫している。大聖堂と異教徒サルタンの行列の対照性、繰り返される疑問符と感嘆符による不確定性と感情の高揚、三日月刀と忍び返しが暗示する暴力、果てしなく続くように思える行列を成す無数の踊り子と象、そしてそれらが醸し出す圧倒的力と悪夢のような雰囲気。こうした非日常的混沌が、西洋人が自らの至高性の意識を土台にオリエントに付与した官能性と相俟って、現実世界に広がり、不安定さを増幅してゆくのである。エドウィンに対する同性愛的感情もそうだ。セジウィック(Eve K. Sedgwick)は、作品中の同性愛的要素を調べた論文の中で、この作品をリチャード・パートン(Sir Richard Burton)やT・E・ロレンス(T. E. Lawrence)といった、男性の同性愛をオリエント、特に中東のものに見なす帝国の探検家の著作と並べて扱っている。⁸ 同性愛はオリエントに転置され、いわば社会は自己保全を図っているのである。したがって、ジャスパーの感情は、阿片による意識の中でのみ浸れるオリエント的なものなのである。それは、キリスト教神学が「自然に反する罪」の烙印を押す行為である以上、表に出ることがあってはならない。ジャスパーのこの抑圧された異教徒的愛情が、クロイストラムの人々には甥への度を越した熱愛、エドウィン本人には彼に対する「女みたいな」「womanish”(118)態度となって現れる。甥への愛とぶつかり合い、彼を精神的に不安定にしているのがローザへの報われぬ愛なのだが、夢の中で楽しんでいた、この激しい情欲を伴った異性愛も、エドウィンの失踪と共に解き放たれる。しかし、第19章でのローザへの愛の告白は、相手の愛を勝ち得んとするような性質のものではない。彼女自身、彼の存在や一挙一動に動揺する点から、無意識のうちに反応するセクシュアリティの持ち主であることが分かる。だが、セアラ・ルイス(Mrs. Sarah Lewis)を連想させるような、「未来の良妻賢母の薫育に当たる」(52)、家父長制社会の忠実な僕ミス・トウィングルトンによってそれを押さえ込まれた彼女には、彼は、

社会の価値観では判断できない“[t]he fascination of repulsion”(175)を喚起する両義的存在なのである。彼はこのときも、夢想のとき同様、一人酔い痴れているに過ぎない。彼女は、彼の興奮した夢想を引き起こすきっかけでしかない。彼には、自分が彼女に嫌われているのが分かっており、彼女の嫌悪こそが、彼が抱く彼女の像を实体化し、彼にマゾヒスティックな喜びを与えてくれるのである。庭の周囲の窓は、彼女に激白する一方で、外面は冷静さを保つ自分自身の姿を映し出す鏡と言えよう。彼はこの分裂した自己に酔っている。しかし、それは同時に、彼が自らの二重生活を他人に示したことにもなる。阿片による夢想をそのまま表の世界に持ち出してしまったのである。阿片は、ジャスパーを通して、下層階級やオリエントに対する中産階級のヘゲモニーをくつがえす危険性を持ち込んで来る。

内なるオリエント

社会はこのように、オリエントによる汚染の恐怖に晒され、両者の境界は容易に侵犯される。だがそもそも、ジャスパーの心の中に抑圧されていたものが、阿片によってそのたがを外されたに過ぎない。イギリス人自身の中に、彼らがオリエント的なものとして軽蔑するものが存在しているのである。それを反映するかのよう、社会自体が、すでに自他の境界が不確定な状況に陥り、体系・秩序が攪乱したものと描かれている。社会を特徴づけるイメージとして、まず粉末化現象が挙げられる。大聖堂の地下室に埋葬されている昔の偉い人の遺体は、ダールドが棺桶を開けた途端に粉々に砕け散る。粉末化は、作品の展開上重要な役割を果たすであろう生石灰の腐食作用と結びつく。こうしてあらゆるものが摩滅し、粉末化され、分解していった結果は、個としての特徴を持たない物質が増殖してゆくことになる。砂、砂塵、灰、煤、そして区別のつかない細かな塵があたり一面を覆う。生者も死者も、「生きて呼吸をしている土くれ」、「その呼吸が止まってしまった土くれ」(105)となり、共に「土くれ」と化して、もはや区別はなくなる。この乾いた粉末化状態はクロイストラムに限らない。ロンドンもまた、全体が「埃っぽい街路の砂漠」(176)と化する。

埃への分解は、個々の人間を規定する境界の奇妙な喪失とも結びつく。すでに見てきたような、阿片を通しての、中国人、インド人水夫、パツファー妃殿下、ジャスパーの一樣化と同じ現象が社会の中でも起こっているのである。サブシーは、もう一つの精神を自らの中に「吸収したい」(26)と望んでミス・プロビティと結婚する。そして彼女の死後、彼女の墓を自分自身の記念碑に変えてしまう。そのサブシー自身、自らのアイデンティティを消し去って、世俗的な大聖堂主席司祭をまね同一化することに誇りを覚える。デビュティにしても、これが彼の正式の名前でももちろんなく、「代理」を意味するあだ名であるわけだから、

彼のアイデンティティは誰か他の人物の代用品に過ぎない。

境界の消滅は時間的混乱という形でも表現される。阿片の作用は、作品冒頭のジャスパーの夢に見られたように、空間的混乱を引き起こしていた。それに匹敵する時間的混乱が、クロイストラムやロンドンに起こっているのである。クロイストラムでは過去に時が停止し、あるいは過去と現在が入り交じり、町中に「修道院長や尼僧院長の塵」や「修道僧や修道女の泥まんじゅう」(14)といったグロテスクな物質が充満する。またロンドンでは、時の進行は妨げられ、「万物は永久にやって来ないものを待っているような、奇妙で不快げな様相を呈してい」(197)る。時間の直線的な流れは歪められるのである。

このように見てくると、社会を構成する個々の要素の不確定化は、父権的象徴秩序の世界ではなく、阿片という形でオリेंटを持ち込む阿片窟と同じく、混沌とした世界をイギリスに作り出していることが分かる。社会が劣等で野蛮なものとして排除するオリेंटとの間に、エドウィンが言うような「安全な距離」(59)はもはやない。「イギリス的」か「非イギリス的」かなどという区別は絵空事でしかない。そこには、世界最高の文明社会ではなく、自然な状態が現出する。初めてクロイストラムを訪れ、大聖堂や僧院の廃墟などを見て喜ぶランドレス兄妹を、クリスパークルは「どこか熱帯の未開地から連れて来られた、美しい原始人の捕虜みたいだ」と思うのだが、その直後に、「ハニーサンダー先生は車道の真ん中を歩き、肩で風を切っては町の原住民(natives)を追い散らし、自分の計画を大声で語っていた」(44)という文が続く。もちろん一義的には、ハニーサンダーが海外の「原住民」に夢中になっている態度を皮肉ったものなのだが、今まで見てきたようなイギリス社会の実態を考慮すれば、別の逆転した読みも可能ではないだろうか。むしろイギリスの方が、廃墟と化した文明の中に住まう「原始人」であり、ランドレス兄妹は新世界から旧世界にやって来た、言わば、マコーリによって広められた、廃墟のロンドンを眺める「ニュージーランダー」のような存在だという解釈が成り立つのである。⁹この解釈を補強するように、イギリスには、「まるで気違いマレー人みたいに、めちゃくちゃに暴れまわる」(152)ハニーサンダー一派、無知と無視の犠牲者であり、「文化的な目標」(34)を持たないために「野蛮人の子供みたい」(32)デピュティとその仲間、「野蛮な態度」(206)を密かに示すジャスパーが闊歩する。社会は内と外の両方から境界を突き崩され、原始へと回帰するのである。

イギリスの反撃

作品の展開の中で、社会は「父なるもの」としての秩序を回復しなければならぬ。その中心を成すのがクリスパークルである。名前からして余りに明るく健



Gustave Doré, "The New Zealander"

康的なイメージを帯びた彼は、東洋人とは対照的にアングロ・サクソンに備わっているとされた明晰・率直・高貴さを身につけた人物で、¹⁰聖堂小参事会員、日々欠かさぬスポーツ、パブリック・スクール出身という要素からして、明らかにトマス・ヒューズ(Thomas Hughes)が美化した「筋肉的キリスト教」、言い換えれば男性的なキリスト教の実践者である。彼とネヴィルとの関係の背後には、80年代以降社会ダーウィニズムが普及する以前の自由主義時代に見られた、イギリスは遅れた未開人を改造あるいは進歩させ、自分たちの

高みに引き上げることを使命とするという「文明化の使命」論が読み取れる。¹¹それを裏づけるかのように、ネヴィルのメントルとして彼は、遠く離れた異国の風土・環境がネヴィルの性格にどのような影響を及ぼしてきたかを顧みず、イギリス社会が認める形に彼を無理やり矯正しようとする。したがって、ネヴィルがエドウィンの婚約者ローザに恋することは、社会が是認した取り決めに犯す行為であり、許されるものではない。彼はそれを「不合理で不埒な気まぐれ」(83)と決めつけ、ネヴィルに自らの感情の抑制を強いる。クリスパークル自身は、あくまで良心的に、自らの義務と考えるものを果たしているに過ぎないが、彼の態度は、ネヴィルの属していた世界の妥当性を頭から否定し、イギリス社会の価値を是とするものなのである。相手の内面を見ず、その上に陳腐な価値判断のヴェールを被せているに過ぎない。ネヴィルが「虎の血」を垣間見ると、彼はたちまち「本職の警官」(“a Police Expert” 61)に変身し、ネヴィルを秩序立った部屋に監禁する。野生の獣は文明の監視のもと、飼い馴らされ同化されねばならない

のだ。その仕上げは、彼をロンドンの下宿に妹と共に軟禁状態に置き、社会秩序成立の基礎となる法律を学ばせることとなる。だがネヴィルは、殺人犯の疑いをかけられていることと相俟って、たぶん致命的なまでに健康を損ねてゆく。彼は「イギリス化」の過程を生き延びられない。彼にとって道徳的洗練化とは、エネルギーを吸い取られ、不活発な存在となるのに等しい。そして、これによって、社会がネヴィルの生命力に対して無意識のうちに抱いていた恐怖心も鎮められることになる。

では、クリスパークルの秩序構築作業は実を結ぶのだろうか。彼の浅薄な慈愛の念と陳腐な道徳観が、彼の限界を形作る。彼は「現在のキリスト教界の要職」(6)に満足し、自分自身や他人に対して皮肉な見方ができない。純真な彼には、主席司祭の欺瞞や保護者然とした態度が全く見えていない。彼の朝の運動は彼の限界を如実に物語っている。「鏡に向かって勇猛かつ技巧満点なボクシング」をするとき、鏡には彼自身の「健康そうで爽快な肖像」(38)が映る。ジャスパーが自己の内面に巣くう悪魔とつかみ合っているのに対して、彼には敵は見えず、自分自身の慈愛に満ちた顔を相手に鍛練し自己満足に浸っているに過ぎない。鏡のイメージから分かるように、物事の表面しか見えないのである。表面しか見ないために、精神的にも肉体的にも健全でいられるのだ。さらに、現実の人生から逃げている面すらある。語り手は、一緒に住んでいる人物としてクリスパークル夫人を挙げた際、わざわざ「といっても、セプティマス師の母であって妻ではない」(38)とつけ加えている。35歳を越えた今も、母と息子の関係は3歳半を越えて以来何ら変わっていない。そこからは、母子融合状態から父権の象徴秩序へまだ完全に脱し切れていないクリスパークルの姿が浮かび上がる。彼自身が精神的に混沌を抱えているのである。

クリスパークル以上に秩序構築に貢献すると思われる人物が、ターターである。「船乗り」を意味する「ター」を名前の一部に持つ彼は、7つの海を股にかけた元海軍将校であり、パブリック・スクール時代に溺れかけたクリスパークルを救ったエピソードからも、ジャスパーの情念の海を乗り切るであろうことが期待できる。しかし、我々が彼に関して注目したいのは、彼が帯びる「男らしさ」“manliness”である。彼はパブリック・スクールではクリスパークルの「ファッグ」(184)であり、二人の間には男と男の関係が、クリスパークルとネヴィルとの間に見られたような、ヒエラルキーを伴って形成されている：“The two shook hands with the greatest heartiness, and then went the wonderful length — for Englishmen — of laying their hands each on the other’s shoulders, and looking joyfully each into the other’s face” (184). ジャスパーのエドウィンへの愛情が退廃をもたらすものとして排除されるのに対して、彼らの関係は美化される。1880年代以降の帝国主義時代へ

の突入と共に、¹²パブリック・スクールは、大英帝国の運命を担って雄飛する人材を輩出する機関となった。そこで要求されたのは「男らしさ」だった。その萌芽がすでにここに見られるのである。クリスパークルとターターが見つめ合うとき、そこには強いイギリスのイメージが重ね合わされる。“gallant” (189)と何度も形容されるターターは、クリスパークル以上に元気がよく、男らしく、彼が海軍という「帝国の楯」に属していたことを考え合わせれば、まさに国家の忠実な子分なのである。彼からは、19世紀中頃「男らしさ」を意味した両性具有的混合は影を潜める。¹³ その代わりに、世紀末になるにつれて次第に強まる、帝国建設のための強い精神と肉体を備えた、攻撃的なイギリス人男性のイメージが付与される。いや、現存するテキストで判断する限り、それだけの人物像しか与えられていない。彼は、1870年以降のヘンティ(G. A. Henty)の少年冒険小説に登場する主人公のように、「男らしさ」が前面に押し出され、内省とか自己卑下とかいった内的生活を持たない、健全さを最上の美德とする人物なのである。

ターターが担う「文明化の使命」は、彼の部屋の描写に表れている。それは「魔法の豆の木の天辺にある国」(188)に位置する。この表現は何度も繰り返される。その背後に当然我々は、「ジャックと豆の木」の民話を見て取る。長島伸一氏によれば、この民話は、ジャックをイギリス人少年、雲の上は野蛮な異国の地、人食い鬼はイギリス人少年が好物の異教徒にして異民族と解することができる。¹⁴ ジャックが人食い鬼を退治するのは、イギリスが植民地を獲得する過程とも解釈できるわけである。この解釈を下敷きに「魔法の豆の木の天辺にある国」に位置するターターの部屋が持つ意味を考えてみれば、そこはターターという軍人によって支配された植民地という解釈が成り立つ。彼の部屋には「しみ一つ、汚れ一つ、泥のはね一つ」(188)なく、あらゆるものがあるべき場所に秩序整然と納まっている。野蛮な土地には文明がもたらされたのである。文明化はこの狭い空間に止まるものではない。クリスパークル以上に病的なまでに清潔さにこだわる姿勢には、汚穢を排除しようとする公衆衛生学の戦闘的な響きが感じられる。クリスパークルが警察管理と、その名が示す光によって、野蛮な暗黒の地に文明をもたらすように、ターターは衛生管理によって内輪の領土を守り、かつ広げようとするのである。¹⁵ また、部屋に世界中から持ち帰った珍しい土産、言い換えれば分捕り品が分類・整理されている事実からは、たとえばキュー植物園における世界中の植物採集が持つ、高度に戦略的な政治的意味のようなものが読み取れる。したがってターターの部屋は、周囲の混沌とした野蛮な状態を文明化する橋頭堡としての役割を果たしていると言えよう。だが、圧倒的に陰鬱な雰囲気支配する作品全体の中で、他の登場人物と余りに不調和感を醸し出すターターによって作り出された空間は、周囲と対峙するには弱すぎる。それが移動した

ものと考えられる、テムズ河での舟遊びで作り出された「永遠に緑陰をさしかける庭」(197)は、暗黒の大都会を前にしては消え去るしかない。

結 論

未完作ゆえの不完全さは、作品が本質的に持つ不確定さを強めるばかりだ。書かれた部分で判断する限り、クリスパークル、ターター、それにローザの後見人グルージャスが持つ断固とした公正さや、謎の探偵ダチェリーの無情なまでの追求は、社会の犠牲者の面を持つジャスパーが示す深い精神的損傷に比べれば、ほとんど価値がないように思える。ジェンダーの境界線も揺らぐ。ヘレナは、オリエントとの接触によってある程度男性化され、ジェンダーの境界を越える人物として提示される。彼女は「女らしい感情、分別、勇氣」(155)と「押し潰してしまふほどの強い意志と力」(52)を備えた、古来女と男それぞれの特性とされてきたものを合わせ持つ両性具有者であり、その男性性は、従来のディケンズ作品には見られなかったほどに肯定的に描かれている。事実彼女は、ネヴィルが『いつでも妹は男の子のなりをして、男のような勇気を見せました』(49)と言っているように、幼い頃から女性性を自在に消すことができた。彼女が示す、この男性性と女性性、白と有色の融合によって生じる異種混淆性は、家父長制社会を不安定にする潜勢力を持つ。こうした「新しい女」の出現を前にして、社会は体制維持のため、クリスパークルやターターを通して、ますます「男らしさ」を強調しなければならなくなる。イギリスは、ターターの部屋同様、「ロンドン名物の煤が永久に国から追放されてしまったのかと思うほど」(188)に清潔にされるのだろうか。最終章題が「再び夜明け」と希望に満ちたものであるにもかかわらず、その一つ前の章が「埃っぽい事態の到来」と名づけられていることで、不確定さは消え去らない。

『エドウィン・ドルードの謎』で問題となっているのは、東洋人による逆侵略の恐怖だけではない。それ以上に、そういう事態を引き起こす社会自体が問題となる。帝國的要素は作品のあらゆる部分に絡み合い、それまで「他なるもの、異なるもの」として見下しながら負のレッテルを貼っていた、「母なるもの」に収斂される、野蛮、混沌、欲動といった特性が、一元化されたと思われていた家父長制社会の中にも同様に存在していることが明らかにされる。オリエントは、もはや境界線の向こう側に横たわる異質な空間ではない。イギリス社会に、それも中枢にまで内在化されているのである。にもかかわらず社会は、ジャスパーの心に潜む闇のような、自らの内に存在する、不安を喚起するものとしての他者に目をつぶる。エドウィン殺害の嫌疑を当然のごとくかけられるのが「虎の血」を持つネヴィルである点、そのネヴィルに対してそこはかとなく示される語り手の憐

憫の情、それらに留意すれば、本国内の異質性に目を向けず、負を全て外国人に転嫁する、サブシー、ハニーサンダー、主席司祭のような人物が父たる権威者として牛耳る社会の在り方が問題とされているのが分かる。たとえジャスパーの犯罪が暴かれ、クリスパークルやターターらによって秩序が回復されても、それは表面的なものに過ぎない。アンガス・ウィルソン(Angus Wilson)が述べるような、ジャスパーの悪に対する「はるかに屈強で、はるかに戦闘的な」「善の軍勢」という余りに単純な構図では根本的な解決にはならない。¹⁶ 作品は、父性や帝国主義と結びついた男性性を全面に押し出すことによって社会の健全化を図ろうとする反面、そうした二元的世界観に基づく浅薄な手段だけではどうにもならない、「異質なもの」の存在を絶えず意識している。これこそがこの作品の深い「不安のとげ」なのである。グルージャスの書記バザードの「不安のとげ」という悲劇は、最後には人目を引くことになるかと期待されている。そこには、作品の謎の解決という意味も含蓄されているのだろう。それと同じく、作品の「不安のとげ」も人目を引き、抑圧していたものの表出を現実社会は直視せねばならないのである。

注

- ¹ エクセター・ホールについてディケンズは、1865年11月30日、W. W. F. De Cerjatに宛てた手紙の中で、“Exeter Hall holds us in mortal submission to missionaries, who (Livingstone always excepted) are perfect nuisances, and leave every place worse than they found it.”と述べている(Graham Storey, ed., *The Letters of Charles Dickens*, vol.11 [Oxford: Clarendon, 1999] 116)。『エドウィン・ドルードの謎』とジャマイカ問題との係わりについては、K. J. Fielding, “Edwin Drood and Governor Eyre,” *The Listener* 48 (25 Dec. 1952): 1083-84、および富山太佳夫「ジャマイカからの贈り物」『英語青年』1990年8月号8-10; 9月号22-24; 10月号20-22; 11月号23-25; 12月号20-22を参照のこと。
- ² テキストはCharles Dickens, *The Mystery of Edwin Drood*, ed. Margaret Cardwell (Oxford: Clarendon, 1972)を使用。括弧に入れて頁数を示す。
- ³ Clarendon版“Appendix B: Number Plans,” 222。
- ⁴ Edward W. Said, *Orientalism* (Harmondsworth: Penguin, 1991) 40。
- ⁵ The Reverend George Piercy, “Opium Smoking in London,” *Friend of China* 6 (1883): 239-40。[Joseph Charles Parkinson], “Lazarus Lotus-Eating,” *All the Year Round* 15 (1866): 423-24。
- ⁶ “East London Opium Smokers,” *London Society* 14 (1868): 72; James Greenwood, “An Opium Smoke in Tiger Bay,” *In Strange Company: Being the Experiences of a Roaming Correspondent* (London: Henry S. King, 1873) 233も参照のこと。
- ⁷ Eve Kosofsky Sedgwick, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire* (New York: Columbia UP, 1985) 180-200。
- ⁸ Thomas Babington Macaulay, “Ranke’s History of the Popes,” *Critical and Historical Essays*,

- vol. 2 (London: Dent, 1963) 39. 絵画に現れたものとして, Gustave Doré and Blanchard Jerrold, *London: A Pilgrimage* (London: Grant, 1872)中の“The New Zealander”がある。
- ¹⁰ Said, 39.
- ¹¹ この用語は, “the civilizing mission of the Anglo-Saxon race” (“Our Policy in China,” *Westminster Review*, vol.93, 1870)に拠る。
- ¹² ここでの帝国主義時代とは, 帝国主義をヨーロッパによる他地域の植民地化が始まった16世紀から脱植民地化が進む20世紀末までの長い時間的スパンで捉えながらも, アメリカのマルクス主義経済学者H・マグドフが帝国主義現象の典型と見なした, 19世紀末から20世紀初めの古典的「帝国主義」段階を指すことにする。マグドフの帝国主義理論については, 小原敬士訳『現代の帝国主義』(岩波書店, 1969年), 大阪経済法科大学経済研究所訳『帝国主義 植民地期から現在まで』(大月書店, 1981年)を参照のこと。
- ¹³ Claudia Nelson, “Sex and the Single Boy: Ideals of Manliness and Sexuality in Victorian Literature for Boys,” *Victorian Studies* 32 (1989): 530.
- ¹⁴ 長島伸一『大英帝国』(講談社, 1989年) 93-98.
- ¹⁵ そこにペア石鹸の広告が示すような, 衛生と帝国主義との結びつきを読み取ることも可能である。



“The Formula of British Conquest”: the commodity (*Illustrated London News*, August 27, 1887: 249).

- ¹⁶ Angus Wilson, *The World of Charles Dickens* (1970; Harmondsworth: Penguin, 1972) 291.